

---

# 冒険の続きをしよう

天宮 凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冒険の続きをしよう

### 【Nコード】

N3701Q

### 【作者名】

天宮 風

### 【あらすじ】

他所様にて色々と批評を貰った結果、小説の芯の部分をきっちり書く為にこの小説は完全改稿、もしくは別物として変更される恐れがあります。

読んでいただいていた方には申し訳ないのですが、暫くの間更新無しor小説の消去、新規投稿になるかと思っています。申し訳ありません。 2011/02/04

Arcadiaでも同時投稿、同時に停止中。

## 01. 『はじまり』

「俺……いつも優しくしてくれたニーナさんの事が好きなんだ。だから、付き合ってくれ」

ダスク・ワールドというMMORPGでも、こういった色恋沙汰は良く起きる。

僕の場合は興味本位ではあったけれど、女の子のキャラクターに成りきっていたらいつの間にか告白なんかを受けるようになっていた。

でもゲームの中では女の子キャラだからって現実の僕が女の子になるわけではないのだ。

だから寄せられる好意への返答は決まっていた。

「ごめんなさい。カルドさんの事は好きだけど……お友達じゃダメかな……？」

目の前にいるカルドという男冒険者に問題があるのではない。むしろ好きな部類に入る。

でも僕からの好きは友達としての好きであり異性に感じる好きではないのだ。

それは僕が男だから当然なのであって、僕が僕である限りこういった想いに応えるなんて絶対にありえないことだった。

「はあ」と僕はため息を一つ付く。

カルドという冒険者は最近仲良くしていたプレイヤーだった。

でも告白されればその日から少しだけその人物との付き合い方も変わってくる。

簡単に言えば気まずくなつて疎遠になるのだ。

疎遠になれば次第に合う回数も減り、それはつまり仲の良い友達を一人失うことにもなるわけで、ため息の一つや二つ付いても仕方ないと思う。

「やっぱりここにいたのね」

「……うん」

かけられた声に、僕は少し間を置いてから答えた。

「ここにいるって事は、やっぱりカルド君関係でしょ」

「あはは……。バレバレ、だよな」

「そんなのすぐにわかるって、いつから友達やってると思ってるのよ」

友達。

そう自分から言つた彼女はミシェルという冒険者仲間だった。

彼女は人間に猫耳と尻尾を付けたようなニヤードという種族のキラクターで、ダスク・ワールドが始まって以来ずっと遊んできた友達だ。

そんな古株の友達だからこそ僕が落ち込んだ時の行動なんてお見通しなんだろう。

「で、今回も振っちゃったの？」

「う、うん」

「もう、振って落ち込むなら振らなければいいのに」

「そう言われても付き合うなんて考えられないし……」

こういったやりとりは僕とミシエルの間では何度も交わされてきた言葉だった。

だからミシエルは落ち込んでいる理由が友達を失うことだって知っている。

でも僕が本当は男だということを知らないから、誰かと付き合ってみてもいいんじゃない？　なんてミシエルは思っている節があるようだった。

「あー、もー、クヨクヨしてないで遊ばっ！　あたしもやっとレベルカンストしたから転生出来るようになったのよ」

「え、本当に？」

「そーだよ。頑張ったんだから！」

「ミシエル、おめでとう。でも、今はその……」

「行きたくないっていうんでしょ。でもダメ！　一緒に転生するのは前からの約束だからね！」

ミシエルは駄々を捏ねるように僕の周りをくると走り回る。

転生はキャラクターの能力値やスキルを維持したままレベル1から育て直すことができ、強さの限界を突破させてくれるシステムだ。そんな転生は僕とミシエルの目標であり、一緒にしようと約束していた大切な物だった。

何も今約束を持ち出さなくてもとは思うけど、ミシエルの様子を見ると我慢が利かないらしい。

「わかった。わかったから落ち着いて、ちゃんと一緒に行くからー」

僕はそう言うのと気分を切り替えた。

楽しみにしていた転生だ。

僕は徐々に気分が上向きになっていく中、気分転換の機会を作ってくれたミシエルに感謝した。

冒険の続きをしよう

うつすらと瞳を開けた。頭が重く、鈍い。目の焦点が中々合わない。

ぼんやりと霞む思考に僕は自分が眠りについていたことに気が付いた。

はっとして顔をあげると、そこにはレンガ造りの家が立ち並び…、レンガ造りの家が立ち並び？

疑問に思った僕は勢い良く立ち上がると周囲を見渡した。

正面には古臭い、中世ヨーロッパを感じさせるような建物。

道行く人はやたら質感の良い鎧やらチュニックやらを着たコスプレ衣装を身に着けている。

見上げれば青々とした空。つまりは家の外。

おかしい。僕は自分の部屋でパソコンの前に座ってゲームをしていたはずなのに。

「なんで、なんで！？　なによこれ！　あたしにどーして耳なんてっ！　あ……、尻尾まで生えてる！！」

すぐ近くから大きな声がした。

気になって声のした方に視線を向けると、タンクトップに短パンを穿いて猫耳と尻尾を生やしている女の人がいた。

その姿には見覚えがある。

恐らくはダスク・ワールドの種族ニヤード……なるほど、これもコスプレだろうと思えた。

でも、どこかでこの人を見たことがあるような。

なんて考えていると、その人は僕をじっと見つめ「うーん」と唸ったあと何かに納得したように手を一度叩き、口を開いた。

「そのキミ！ キミだよキミ！ そうそう、キミ！ なんかあたし変な格好してるけど怪しくないんだけど怪しくて、あー！ もう！ とにかくここってどこかわかる？」

「え、えええつと、どこかって言われても……逆にここがどこか聞きたいというか……」

「ん、その耳ってエルフでしょ？ つまりこのわけわかんない中世ワールドの現地人」

「耳？」

「そそ、耳」

わーっとまくし立てるような喋りに若干引きながらも、言われた部分に手を伸ばして見る。

耳、と言われても別に普通の……大きな、横に尖って、あれ。

「耳だ！ エルフ耳！」

「そうそうエルフ耳……って、自分がエルフだって気づいてなかったの？」

自分がエルフだなんて、そんなバカなと思いつつも視線を自身に向けた。

視線を下げれば衣服を盛り上げる大きな双丘。視界の端に見える金色の髪はとても長い。

白く繊細そうな肌に小さな手。身に着けているものだって緑のチユニックワンピースを腰のベルトで止めた簡素な服。

これに耳を加えるとたしかにエルフっぽいかも……。

いや、エルフっぽいとかそこが問題なんじゃない。

僕の体が女の子になっている方が問題なのだ。

「コホンッ！ 驚いている所悪いんだけど、その様子だとキミも不

本意にその姿になってる？」

「キミも、という事はもしかしてそっちも？」

「うん、こっちも。あたしこんな耳付いてるはずないし、ていうか尻尾生えた人間なんていないってば」

それを言うなら僕だってこんな胸や細い体はしていない。

何にしても僕とこの人は同じ境遇で、たぶんこの人はダスク・ワールドのニヤードという種族になっている。

僕はエルフらしいけれど、なぜそんなことに？ と疑問符が何個もついてしまいそうだ。

現状はどう考えても異常だと言えた。

「ちょっと、ねえ。聞いてる？」

「あ、うん。えっと、何の話？」

「だーからー、キミってなんかあたしの知り合いに似てるって話」

「知り合いに？」

「うん、知り合いというか友達なんだけど」

友達、その言葉で思い出すのはついさっきまでダスク・ワールドで一緒にいた彼女のこと。

ちよつと勝ち気なそうな瞳に細身の体、ショートにした赤い色の髪、それが彼女の容姿だった。

そして目の前の人の容姿もゲームの中の彼女に似ている。

類似点を見つけてしまうと、話している時の勢いというか雰囲気もそれらしく感じてきた。

「私もあなたに似てる友達を知ってるよ」

そうだったらいいな、という期待を込めて同じ意味合いの言葉を重ねた。



僕ではなく私として答えたのは、彼女の友達があくまでもゲーム中のニーナというキャラクターだから。

もしこの人が彼女じゃないなら、正直に話す方が楽だし正確な情報をやりとりしやすいと思う。

でも確信を持っていた僕は私と名乗ることを選択した。

「……もしかして、ニーナ？」

少しの沈黙の後、彼女は真剣な顔つきで僕を見つめながら問いかけてきた。

ニーナという名前を知っているのなら間違いはない。

「うん、そうだよ。ミシエル」

そう言うた僕は彼女に向かって笑みを漏らした。

ゲームの中でしか会った事がないとはいえ、僕と彼女……ミシエルは長い付き合いの友達だ。

だけど実際の言葉にして彼女の名前を呼ぶのは初めてで、少しだけこそばゆい感じがした。

僕らは人通りを避け、状況を整理する為に通りの裏へと回ったのだが……。

暫くもしない内にミシエルは「むむむ」と言いながら僕の顔、そして胸を凝視しながら話の方向性を変えてきた。

「なんていうか、ニーナはズルいと思うな」

「え、え、急にどうして」

「だって、今のニーナはなにこれって位可愛いし。なんでいかにも少女って外見なのにそんな胸育ってるわけ」

「う、こんなの、私欲しくてなったわけじゃないし……」

実際見るまでは可愛いかどうかはわからないけれど、僕の作った二ナというキャラクターは小柄な体系で……その、巨乳気味だったりする。

では僕がその姿になりたかったかということ、ハッキリ違うと答える。

どちらかといえば、こんな女の子が居ればいいなという願望から生まれたキャラクターなわけであって。

そもそも性別が変わることなんて望んでいないわけで。

「あたしの方なんてこれだよこれ。リアルでだってこんなに酷くないのに」

僕のこんな内心を知らないミシエルは、自身の胸をペタペタと触りながら気落ちした様子で言う。

僕としては余計な物の少ないその体と交換して欲しい位だけど……

……いや、でも、猫耳は嫌だ。恥ずかしい。

「で、でも、ほら、ミヤードはスリムでみんなそんな感じだし。すらつとして格好いいというか……整った綺麗さがあると思うよ」

「たしかにそうなんだけど、なんか納得いかないっていうか……」

「それにこんなのあっても重いだけだし」

「……」

「……」

「この口がそんなこと言うのか。あたしだって重いつてみてみたいのに――」

僕が自分の胸を見ながらうんざりしたように言つと、ミシエルに思いつきほつぺをひっぱられた。

つて、痛い、痛い！ 頬がのびる！

なんとかやめさせようとミシエルの手をどかそうとするけど、その手はビクともしない。

「ひ、ひふあい！ やめへー！」

「半分よこしなさいー。このー！」

「あふえる。あふえるはらー！ やめへー！」

ミシエルはひとしきり僕のほっぺで遊んだ後、やっとその手を離れた。

情けないことに僕の目尻には涙が浮かんでいたけれど。

「うう、すごい痛かった……」

「あたしそんな強くしてないわよ。軽くむにむにつて触っただけなのにー」

僕の痛がる様子を見ながらミシエルは不思議そうに手を開いたり閉じたりしている。

でも軽くの割にはヒリヒリとほっぺが痛む。むしろ涙目になるほど痛かった。

……まさかとは思うけど、エルフって軽くでも痛みを過剰に感じる敏感肌とか？

むしろニヤードの力が強い？ さっきもミシエルの手をどかせなかったし……。

「ね、ニヤードって怪力種族じゃないよね？」

「あはは、そんな訳無いでしょ。猫らしく速さが自慢の種族だしー……って、あー、でもあたしのキャラ近接戦闘特化だから力強いかも」

「ミシエルは近接ステータスばかり振ってたのは知ってるけど、でもキャラのステータスが反映されてるなんてそんなの……」

「ありえなくはないわよ。だってあたし達がゲームのキャラになつてゐるっていうのがまずありえないんだし」

状況を整理している時に互いが自分のキャラクターになつてゐる事は確認していた。

そんな事は普通に考えたらありえないのだ。だから何があつたつて不思議ではないかもしれない。

となるとダスク・ワールドの力、耐久、知力、器用、速さという五つの能力値が僕たちに影響を与えている可能性はある。

ミシエルの場合は近接戦闘に重要とされる力、そして種族の特性を生かすよう速さに多くのポイントを振つてゐる。

このポイントというのはレベルアップ毎に一定数配られ、好きなように能力値に振ることが出来るようになってゐるのだ。

とりあえずその能力値の恩恵をミシエルが受けているなら力が強いという仮説はあつてゐる。

「能力値が関係すると、私つてすごい非力になつちやう気がする。力とか全然振つて無いし」

「ニーナの場合は知力とかでしょ？」

「うん、エルフつて魔法を使うイメージあつたから、それっぽい知力に全部振つてるよ」

「あ、じゃあさ、魔法とか使えるんじゃないの？」

「うーん、使える感じは……」

魔法という単語を意識した途端、僕の頭に言葉が羅列された。

そこからゲームの中で最も多く使用したであろう魔法を選択する。あくまでその思考は自然で、慣れ親しんだゲームでの一連の動作と似ていた。

僕は祈るように両手を胸の前で組み、キーとなる言葉を口にする。

我らを見守りしモノ、聖なる光よ。大いなるその翼にて傷を癒せ。

『ヒーリング!』

翼が舞い、光が後を追う。

それは輪を描くように僕を中心に集まり抱擁する。

光系統、初級に位置する回復魔法。

ゲームの中でピンチの時に何度もお世話になったスキルの一つだ。

「うわ、ほっぺのヒリヒリが治ってる……」

翼が小さな粒子になって霧散すると、僕は呟いた。

見た目だけではなくちゃんと効果もあるらしい。

「す、すごい……。ニーナ、魔法、魔法よ!」

「うん、なんか使えるみたい。頭の中にパーって文字が浮かんできて、いけるな!って思ったなら出来ちゃった」

「頭の中? じゃあ、あたしも……ん!」

「ど、どう?」

「んゝ、うゝ! ……ヒーリング!」

ミシエルは眉間に皺を寄せ何度も唸ったあと、回復魔法のキーとなる言葉を大声で口にした。

「……」

「……」

しかし効果は現れず、木枯らしが通り過ぎたような微妙な空気が流れる。

「ねえ、ニーナ」

「な、なにかな」

「これ、すごい恥ずかしいわよ」

ならあんなに大きな声で言わなければいいのに。

とは思ったけれど、どうしてミシエルは魔法を使えないんだろうか。

僕とミシエルの違いは、種族、ステータス、前衛、後衛、魔法……  
…んん？

「もしかして、ミシエルって魔法覚えてくれない？」

「ん、魔法なんて覚えて無いわよ。知力ないし、近接だよあたし」

「うんうん、だからたぶん、近接なら近接技能つてあるよね」

「あ、そっか。キャラになつてるなら覚えてるのしか使えないってことね」

「うん、きつとそうだよ。だからミシエルだとそっちの方を使えるんじゃないかな」

僕はそう言うと一歩下がった。

近接技能は攻撃が主になっているから近くにいては危ないと思っただからだ。

ミシエルは考えるそぶりを見せると、腰を落としたまま息を吸い込んでキーとなる言葉を口にした。

『クロスブレード！』

それは十字を模した剣技。

ゲームではたしかアンデッドに絶大な効果を誇る、使い勝手のいい技だ。

エフェクトは金の十字架が表示されて……、されて……？  
おかしい、まして何も起こらない。

「あたし、すごいことに気が付いちゃった」

「うん、偶然だね。私も気が付いた」

そう、これは剣技なのだから剣が必要になる。  
でもミシエルは素手、だから……。

「剣がないと発動するわけじゃない」  
「だよね」

今度こそ本当に、木枯らしが通り過ぎていくのを僕は感じていた。

## 02・『必要な物は？』

レンガ造りの家が立ち並ぶ表通り、城まで続く道を僕は歩いて  
いた。

ミシエルが軽快に歩く中、僕はトテトテと時折駆けるようにしな  
がら追いかける。

キャラクターの歩幅が違うし、現実では歩く機会もなかったブー  
ツのせいで上手く歩けないのだ。

ゲームの中ではみんな等速だったのに、少し不公平だと思う。

「歩くの早い、早いつてばー」

「違う、違う。ニーナが遅いんだから……、もう、仕方ないわねー」

ゆっくりとした歩調になったことに「ふう」と一息付いて安堵す  
る。

文句を言いながらも歩調を合わせてくれる所はミシエルらしい。

とにもかくにも僕らは目的地へと向かっていて、それがどこにあ  
るかを知っている。

なぜなら僕らはダスク・ワールドの世界にいるのだから。

家と家が生し合わせたように揃った綺麗な街並みも、行き交う人  
々、エルフ、ニヤード、その他もろもろ種族が入り混じったこの街  
の風景も。

規模こそは大きくはなっているものの、僕とミシエルの知ってい  
るダスク・ワールドというゲームそのものだった。

だからゲームの世界に来てしまったというのが二人の間での共通  
認識。

さて、そのゲーム、MMORPGダスク・ワールドだけど、そこ  
まで特徴のあるゲームではない。



普通のMMORPGと同じように、街の外やダンジョンを徘徊するモンスターを倒して経験地を得るレベルアップ方式のゲームだ。生産と呼ばれる物造りのシステムは多少は凝っていたようだけれど、材料を規定数集めて製作のボタンをクリックすれば出来上がる簡単な物だった。

キャラクターカスタマイズも近年の定番ともいえる膨大な種類のパーツから選べる物。これも自由度はあれ定番だ。

一通りの対人戦や、自分の家を持てるハウジング、膨大なクエストとこまごまとしたものはあったけれど、所謂前時代的なゲーム。そんなダスク・ワールドに僕が惹かれた理由は何だったろうか。

「うーん、雰囲気かな……？」

「ん、何か言った？」

「あ、うん。ダスク・ワールドって建物とかそういう景観の雰囲気がいいなって」

「それはそうよ。開発者のインタビューでだったと思うんだけど、中世ヨーロッパ、ゴシック調の雰囲気を出すのに現地取材に何ヶ月も滞在したとか、そういうの載ってたもの。だから、街灯一つ一つも本格的な……」

話を聞くとどうやら世界の雰囲気とかそういうのが売りの一つになっているみたいだ。

もしかしたら僕もそんな雰囲気に惹かれたのかもしれない。

「だからね。この街が、ほらあそこに見えるお城を中心に広がっているの……」

「とと、ミシエル。ストップストップ」

「え、なーに。今からがいい所なのよ」

「えっと、それはいいんだけど、もう銀行に着いちゃったよ」

「あ、本当。うー、でもほらあそこのお城がね」

説明の続きを始めたミシエルを他所に、僕は銀行へと足を進めた。

「ほらほら、先行っちゃうよー」

「……あつ、待ってよニーナ！」

銀行。

それはダスク・ワールドにおける冒険者のアイテムを一手に扱う施設だ。

銀行という名称には若干の引っかけかりを覚えるものの、銀行メイドなる受付嬢が窓口となつて僕らの冒険をサポートしている。

その銀行メイドは一人一人個別の容姿をしていたりと、無駄な所に凝っているなーと思っていたものだ。

そんな銀行には僕らの集めた装備やお金といった様々な物が預けられている……はずだった。

「ちょっと、どういふことなのよ！」

「ですから何度も申しますけれど、お客様のアイテムはお預かりしております。いい加減にしてくださいませんか、ガードを呼びますよ」

物凄い剣幕でダンッと机を叩きながら銀行メイドに詰め寄るミシエル。

そうなるのは半ば当然で、ここが本当にダスク・ワールドなら僕らのアイテムは銀行にあるはずなのだ。

だからアイテムがないという銀行メイドの対応は腑に落ちない。

それに預けていたアイテムの中には人から貰った大切な物も含まれているし、ゲームが始まってから集めに集めたレアリティの高い物だって大量にあるのだ。

ないと言われたからといって中々諦めきれるものではなかった。

「だからないはずなんてないんだってば！」

「ですから……、ふう。ガード、来てください！ 営業妨害です。お願いします」

「営業妨害って何よ。いいからあたしのアイテム……、って、何よあんだ。ちよつとどこ触って！」

結局の所、街を守る為に存在する警備担当のガードに僕らは追い払われてしまった。

僕の方のアイテム保管の有無は聞いていないけど、それを聞く為にもう一度中に入るのは不可能に思えた。

銀行入り口に配置されているガードの視線が友好的にはとても見えないし、ガードは治安維持の為のNPC。

そんなガードにこれ以上悪印象を与えるのは良くないと思えた。

「なんなの！ なんなの！ なんなの！？」

ミシエルは尻尾を立てながら地団駄を踏み、銀行の入り口を睨む。その気持ちはわかるけれど、それよりも今後どうするか of 行動指針を立てなくてはならない。

銀行のアイテムがあれば大抵のことはどうとでもなると考えていた。でもそれが引き出せない僕らは何も無い状態でこの世界を歩かなくてはならない。

魔法が使える僕はまだどうにかなるけど、少なくともミシエルにはスキルの発動条件になっている武器が必要だった。

手持ちのお金もない、となると取れる方法は……。

「ね、ミシエル」

「なによ……」

「えっと、ごめんなさい。銀行使えないみたいだから、次どうしようかなって……」

「あ、う、こっちがごめん。あの銀行メイドが悪いんだからニーナにあたっても仕方ないのよね……。でも次って言われてもどうしたらいいかわからないわ」

振り向きながら不機嫌そうに返事をしたミシェルだったが、僕の顔を見ると罰が悪そうに視線を横に逸らした。

それに合わせて尻尾がしゅんと垂れていくのはちょっとだけ面白い。

「じゃあ、職業選定所に行ってみない？」

「え、職業って……初心者でもないのにどうしてそんな場所にいくのよ」

「ちよつと考えてたんだけど、私達はダスク・ワールドの世界にいるよね。で、私達はキャラクターになってて、着てる装備ってたぶん初期装備」

「そうね。この安っぽい服とか初期装備かもしれないわ。でもどうしてかしら、あたしこんなの装備してなかったはずよ」

「うん、自分のキャラになってるなら私達が初期装備してるのって変だよ。でも可能性があるとすれば……転生したから」

「転生？」

「そう、転生。文字通り私達が生まれ変わってるとしたら新規キャラと同じ初期装備でもおかしくないし」

「なるほどなるほど。それはあるかもしれないわね」

「うん、新規キャラと同じ扱いなら一度しか貰えない選定所の報酬だって貰えるはずだし。確か転生だと職業を新しく着き直せるってどこかで……」

「それ間違いないわ！早速行ってみましょう！」

「で、でも、間違ってるかもしれないし……って、わ、わ、そんな

に急がないでっ」

説明を聞いたミシエルは急かすように僕の手を引っ張っぱると駆けだした。

職業選定所は戦い方なんかの基礎を教えてくれる大きな施設で石作りの神殿のような外観をしている。

冒険者は最初にここを訪れて自分の職業を決定することから物語が始まるのだ。

その職業を決めると、職業に合わせた武器を報酬として入手することが出来る。

それが僕たちの狙いだった。

「ここに名前と希望の職業を記入しろ」

職業選定所に付くと受付から一枚の紙を受け取った。

「名前だけでいいのかな……」

「ん、苗字ないんだから別にいいんじゃない？」

ニーナ……っと、職業はどうしよう。

前に僕がついていたのは神聖術士。神の奇跡……光の魔法で味方を支援、回復する職業だった。

他には前衛に分類される格闘家、斧戦士、剣士、槍騎士、狩人、盗賊や。

後衛に分類される精霊術師、屍術師、錬金術師、など様々な職業がある。

転生は前回のスキルを受け継いでいる、だから神聖術士という選択肢はない。

前衛職にして何でも出来る万能型にするのも面白いけど、僕の能力値は知力のみ……残念ながら後衛向きだ。

「これにしよう」

そう言いながら僕は精霊術師と記入する。

錬金術師は錬金にお金がかかるとか職業だったと記憶してたし、屍は……ゲームならまだしも現実で仲良くしようとは思わないのでやめておいた。

それに何より、エルフなんだからイメージ的に精霊魔法位使えてもいい気がしたのだ。

「なにになに……えーと、ニーナは精霊術師にしたのね」

「ミシエルは？」

「あたしはこれ。盗賊よ」

少し意外だと思った。

僕が魔法を使ったときにはしゃいでいたから、魔法を使える職業に付くのかと思っていたのに。

でもどうして盗賊に……。

僕は記入した紙を受付に渡しながらミシエルに問いかけた。

「盗賊なの？」

「あたし達ってなにもないし、アイテムのドロップ率アップがある盗賊でお金稼げた方がいいじゃない」

すごく納得。とても切実で現実的な理由だ。

受付の人は二人分の紙を一つに纏めると「奥へ行って女神に祈れ、それだけでいい」と言って女神を模した像を指差した。

奥はこじんまりとしていた。  
女神像がぼつりと一体立っているだけで無駄なものはない。  
人すらもない。

なのに何かに見られているような、そんな気配を感じた。

「私からやってみるね」

僕はそう言うと胸の前で両手を祈るように合わせて瞳を閉じた。  
途端、僕の中に何かが流れてくるのを感じた。

言葉、思想、呪文、歴史、精霊、世界……知識を与えられている  
感じがする。

恐らくは精霊術師に必要な物なのだろう。

暫くして僕は瞳を開いた。

手には硬質な感触がある      鉄で作られた魔法系初期装備のロッ  
ドだ。

頭の中には新しい魔法が加えられている。

『ファイアーボール』火の攻撃魔法。それは精霊術師になれた証  
だった。

僕はミシエルの方を見て頷く。そして祈りを諭すように一歩下が  
った。

ミシエルは僕がしたように両手を合わせて瞳を閉じた。  
静かに時が流れる。ピクリとも動かないミシエルは今、盗賊の知  
識を与えられているのだろう。

そう思うと女神像を前に祈るミシエルの姿は、どこか現実とは違  
う気がして美しくも見えた。

鈍い光が反射する。

ミシエルの手には報酬のダガーが左右に一本づつ握られていた。

「ふふ、ガンガン稼ぐわよ！」

ニヤリとした笑みを浮かべて僕の方を向くミシエル。

「おー！」とでも言って賛成したい所だけど、僕は致命的なことに気が付いてしまった。

たぶん言った方がいいだろう。

「ミシエル。思っただけどダガーだと短剣だから剣技って使えないんじゃないかな……」

そう言うミシエルは手にしたダガーをポロリと落とし唖然とした顔をした。

そして「あつ、ああっ！ しまったー！」という悲しい叫び声が職業選定所に響き渡ったのだった。



### 03・『色々ダメなのだ』

「それじゃ、いっくよー！」

気持ちの良い青空の下、街の外にある平原で僕は気合の声を上げた。

狙うはひよこを太らせて巨大化したようなモンスター……ヒヨッピ。

脳内で回転する文字の群れ、そこから選択するのは火の魔法。

力の象徴たる赤の精霊よ。焚ける炎となり、集え。

「ファイアーボー……」

キーとなる言葉を言い終わる前にヒヨッピがぶぎゅ！ という断末魔を上げて消滅した。

ミシエルのダガーによる一撃でヒヨッピが倒されたのだ。

「あ、またヒヨッピの羽だわ」

楽しそうにドロップアイテムを拾うミシエルは全く自重しない。

さつきからこの調子で一度も魔法を使えてなかったりして、僕としてはとってもびみょーな感じの狩りになっていた。

一回位魔法の試し打ちをさせてくれたっていいのに……。

「とーうー！」

そんな掛け声がして振り向くと、ヒヨッピにダガーが突き刺さるのが見えた。

そしてまたぶぎゅ！ と断末魔が響き、羽が地面に落ちる。

「またまた発見！ とりゃー！」

ぶぎゅ！

ぶぎゅ！

ぶぎゅ！

ぴょんぴょん跳ねるように戦い続けるミシエルの狩りは日が暮れるまで続いた。

僕は大量のヒヨツピの羽を持ち帰ると街で売りさばいた。

単価が安いから、量が多くても大した額にはならない。でも今日の宿代位は楽に確保できる金額だった。

「ニーナってば。ホントごめーん！」

「別に怒ってないですし謝らなくていいですー」

ガヤガヤと人の熱気と食器の音が響くこの場所は酒場。二階は宿屋になっていて兼業しているらしい。

そこで何をしているかというと、料理を頼んだ待ち時間にこうやって問答を続けていたりするのである。

その原因はもちろんミシエルが全部モンスターを先に倒してしまったことについて。

別にミシエルが悪いわけじゃない、魔力の消費とか効率とかを考えればミシエルが見つけたらサクサク倒すのは普通なのだ。

でも、でも、少し位魔法を使わせてくれたっていいと思う。

ハッキリ言って僕の機嫌は悪かった。

「ホントにホントにごめんってば。ニーナって回復職だったから攻撃とかしないと思って、いつも通りにえいやーって」

「だからもういいって言いましたー！」

「う、でも、ほら、次からは気を付けるから……。あ、ご飯来たよー！」

そんな僕たちを気にする風でもなく、コトンコトンと注文した料理が置かれていく。

料理を運んできたおばちゃんが「ヒヨッピの丸焼きとタロルカジュースだよ！ たんと食っていきな！」なんて言ってお腹へさがっていく。

テーブルにはこんがり焼けたヒヨッピ。タロルカという果物を摩り下ろしたジュース。

香ばしい匂いが食欲をそそらせ、僕のお腹をくうーと鳴らせた。

「今日はあたしのオゴリだから、ね、食べて機嫌直して！ ね！」

「別に怒ってないし、お金は共有ってさっき決まったし……」

お腹が鳴った事が恥ずかしかった僕は、ブツブツと文句を言いながらもヒヨッピの丸焼きを一切れ口にした。

何度も噛む。パリっとした皮の食感と溢れる肉汁がとても美味しい。スパイスも効いてて思わず笑顔になってしまいそうな味だ。

もう一口食べようとヒヨッピの丸焼きに手を出した時、にやりと笑うミシェルと目があった。

「さーて、あたしも食べよーっと。……あ、コレ美味しー！」

良くわからないけど何か負けた気分……。

ヒヨッピを食べ終わると、僕たちはタロルカジュースを飲みなが

ら今後の予定について話し合っていた。

こうやってその日暮しな生活するだけなら毎日ヒヨッピを倒していれば大丈夫そうだけど、僕らにはそうもいかない理由がある。

「どうやったらこの世界から帰れると思う?」

「うーん、そこは見当も付かないのよね」

「私も……。じゃあ、このままここで暮らすの?」

「それもアリと言えばアリんだけど、メインストーリーのせいでダメよね」

色々ダメなのだ。

帰れる方法がわからないのは仕方ない。

でもここでのほほんとして暮らすというわけにもいかないのがダスク・ワールドという世界。

ダスク・ワールドにはクエストが無数にあるけど、その中でメインストーリーと呼ばれるモノが存在する。

それが中々に曲者で、世界の破滅を食い止める為にプレイヤーが奔走するクエストなのだ。

破滅を止めるのはプレイヤーなのであって、つまりは何もしなければ世界が破滅しそうな感じがするわけだったりするわけで。

「ダメだよな。知らない内に世界が壊れましたーって死んじゃうのは嫌だし」

「だからといってあたし達でクエストクリアできると思う?」

「あはは……思わない、かな」

ミシエルが問いかけて来てるように、メインストーリーは危険極まりないクエストなのだ。

世界の破滅と銘打っているのだから当然と言えば当然だけど、高レベルのモンスターが多数出現する。

それは今の僕たちでは到底クリア出来るものではない。なにせ装備やアイテムが一切ないのだ。

「銀行が使えればなんとかあったかもしれないんだけど、使えなかったのが痛いね」

「そうよ。あの銀行メイドさえ……」

銀行での出来事を思い出したのか、不機嫌そうな声を出すミシエル。

そこから話題を逸らすように僕は慌てて言葉を続けた。

「とりあえず、装備をなんとかするのが先決だね！」

「……そうね。さすがにメインストーリーをどうするかは装備を整えてからの方がいいわ」

「うん、何かしてる内に帰る方法とかも見つかるともかもしれないしね」

話が粗方纏まると僕は残りのジューズを飲み干して席を立った。そして酒場のマスターに声をかけた。宿に泊まるためだ。

「おじさん、宿取りたいんだけど大丈夫？」

「ああ、一人部屋なら一つだけ空いてるよ」

「んー……、それで構わないわ」

「銅貨10枚だ」

「はい、お金。これでいいわよね」

「鍵はコイツだ。一番奥の部屋を使いな」

「ほら、ニーナ行くわよ」

手際の良さに唖然とするしかなかった僕は、ミシエルに尊敬の眼差しを向けながら二階への階段を登った。

僕らのとった部屋はベッドに椅子と机が一つ付いていた。ぱつと

見は質素だったものの、きちんと掃除されていて悪くない感じがする。

しかしベッドが一つしかないというのは如何なものか。部屋を変えて貰った方がいい気がした。

「ベッド一つしかないし、ちょっとマスターに言ってくるね」

僕はそう言っただけで部屋を出ようとした。

しかしミシエルは不思議そうな顔をしてしてこんな事をのたまっていたのだ。

「え、一緒に寝ればいいじゃないの」

まるで何でもないことのように言うミシエル。

でもそれはよろしくないと僕は思う。

一応僕は男なのであって、ミシエルは女の子……って、あれ、僕も外面だけは女の子だ。

いや、でも……。

「それに部屋はここしか空いてないって言ってたわよ」

僕が固まったまましていると追い討ちをかけるように言葉を続ける。

「でもでも別の宿に行けば空いてる所あるんじゃないかな、とか……」

「えー、疲れるだけだしそんな嫌よ。それに同姓同士なんだから恥ずかしいし」

「私って寝相良くないから！一緒に寝たらミシエル寝れなくなっちゃうよ！」

「気にしなくてもいいのに……、というかなんでそんな嫌がるのよ！……」

「ダメなものはダメ！ 私はこっちで寝るからミシエルはベッド使ってね！」

僕は椅子を引き寄せると少し強めの口調で言った。  
とにかくダメなものはダメなのだ。

ミシエルは女の子であって、友達なのであって、性格はちょっと強引だけど実は気が利いて優しい所もあったり……。

容姿だってスラリと伸びた手足は綺麗で、力の能力値をたくさん振っているはずなのに女の子らしく柔らかそう。

顔だって吊り目気味なんだけど、猫耳と合わさって可愛いといふかなんというか、そうじゃなくて！ 違う違う違う！

ミシエルを観察するように見ていた僕はかぶりを振って背を向けた。その時だ。

僕の体がグラッと揺れた……いや、引き寄せられたと言っべきか。

「そんな所で眠れるわけないでしょー……えーい！」

ミシエルが僕の体を後ろから抱きしめて、ベッドへと引きずり込んだのだ。

「え、えっ！ ミシエル、ダメだって。やめてよー！」

「ふふ、捕まえた！ 今日はこのまま寝ちゃうから。ダメって言っても離さないわよ」

言っても離してくれない上に、全力で抵抗してるのにビクともしない。

僕の理性の為に一緒に寝るなんて絶対にダメなのに！

「いーやー！ ダメー！ 離してー！ ぜったいにダメなんだってばー！」

「ニーナは力に振ってないから逃げられないわよー。早く観念なさーい！」

そう言ってより強く僕を抱きしめるミシエル。

背中にあたる柔らかなものが今はとても憎らしい。……絶壁だと思っていたのに、案外なんていうか卑怯だ。

それにしても、うう、どうして力に振らなかったんだろう……。

「あ、ニーナやっぱり大きい！ この、こうしてやるー！」

「ひわあー！ やーめーてー！」

結局の所、僕はミシエルの玩具件抱き枕になったまま眠ることになった。

……。

ミシエルの体温にも慣れ、寝息にも動じなくなる位には時間が経ち、夜も耽った頃。

いつしか酒場から漏れる騒ぎ声も聞こえなくなっていた。

街から明かりが消えるような、そんな夜遅くに遠くで何かが爆ぜるような音がした。

僕は気にするでもなく眠りにつこうとしたものの、段々と外が騒がしくなっている事に気が付く。

切羽詰ったように叫ぶ声と、ガシャガシャと鉄の擦れ合う足音が聞こえる。

とてもではないけど眠れそうにはなかった。



「んー……、うるさいなあ……」

文句を口にしても、音は止まない。

むしる宿の中まで騒がしくなつて来ているようだった。

ドタドタと人の駆ける足音とざわめき、そして僕らの部屋の扉を  
ダンッ！ダンッ！と叩く音が響く。

「おい！ 中に誰か居るか！？ いるなら逃げろ！ 街にモンスター  
が入ってきてやがった！！」

扉越しにそう叫んだ人は言い終わるとすぐに扉から離れ、去って  
いった。

モンスター？ そんなバカな、と思う。

ここは城のある、城郭に覆われた街だ。普通に考えればモンスター  
が入り込める余地はない。

でも、でもだ。

もし本当にモンスターがいるのなら恐らくこれはイベントだ。

それも限りなく厄介なイベント。

街へのモンスター襲撃……それは僕らが避けようとしたメインス  
トーリーの始まり、『王都襲撃』なのだから。

そう焦る気持ちの中、僕はミシエルの方を向いて呟いた。

「とりあえずミシエル起こさないと……」

そこには騒動の中、穏やかな寝息を立てて眠るミシエルの姿があ  
った……。

## 04・『壊しちゃった』

夜の街は暗く遠くから聞こえる剣戟の音が不穏な空気を出していた。

メインストーリー、王都襲撃。

破滅への第一歩は死者が眠りから醒め、人々を襲うという不気味なものだ。

骸骨系下級種モンスターであるスケルトン、同じ下級種でも少し上の長剣を持った戦士であるスケルトンソルジャー、それらを従えた上級種の死霊使いリッチという構成で襲撃は行われる。

スケルトンやスケルトンソルジャーは下級とある通り雑魚モンスターだ。ここまでは問題はない。

しかし大将たるリッチは骸骨系を統べる上級種に相応しい力を有している。

そんなのに危険な戦いを挑むのは僕もミシエルも簡便願いたかった。

そんな訳で僕らは戦う事を避け避難する事にしたのだが……行く当てもなく彷徨っている状況だった。

というのもミシエルが中々起きなかったからであり、その内に酒場周辺から人がいなくなっていてどこに非難すれば良いのかわからなかった為だ。

要するに絶賛迷子中で街を走り回っているわけなのである。

「何なのよ！ このっ！」

ミシエルがくるとターンすると、月の光を反射したダガーが円の軌跡を描く。

少し遅れてガシャン！ という音を鳴り、スケルトンが骨を撒き

散らしながら吹き飛んだ。

「ああ、もう、さつきから鬱陶しいわねっ！」

人に避難場所なんかを聞けばいいんだけど、全員どこかに非難済みなのか合うことがない。

変わりにといい感じでスケルトンと何度も鉢合わせになり、寝起きで機嫌の悪いミシエルが暴れまわっている訳である。

「ミシエル！ 街の真ん中、お城なら人がいるかも！」

「よし、行ってみるわよ！」

僕はスケルトンに警戒しながら城へと向かった。

城は街と広大な水によって隔たれており一本の橋で繋がれている。入り口は一つなので迷う事もないし城は大きい。だからそこに着くまで苦労はしない。

でも僕は城への道を進まず、その橋の手前……建物の影に隠れるようにして息を潜めていた。

「ねえ、あれってさ。やっぱりアレだと思うのよ」

「私もそう思うんだけど、どうしよう……」

アレと称された存在。

骸骨系モンスター上位の力を持つとされる死霊使いリッチ。

それが橋の前に居座り、骸骨達が橋へと突入する様子を眺めている。

カタカタという不気味な音を立てながら恐れる様子も見せずに突入を続けるスケルトンの群れ。

それを橋の王城側から騎士達が必死の形相で盾を構え、槍で突き、

払い、蹴散らす。

安定した戦いぶりを見せる騎士達は橋で完璧な防衛ラインを敷いているように見えた。

「このままリッチ倒してくれないかしら……」

ミシエルの言葉に僕もそうなければいいなとは思っものの、騎士達が勝つ事はないだろうと思えた。

なぜなら騎士達が骸骨達を殺しても、リッチが死霊魔法で新たな骸骨を召喚しているからだ。

延々と生み出される軍勢を相手に守勢に回っていても勝てるものではない。

ならここで僕らが背後からリッチに奇襲をかけて打ち倒せばいいのだが、それは出来ない相談だった。

リッチは骸骨種を召喚する能力、それらを統率する能力を持っているがそれだけじゃない。

リッチの最も恐ろしい所は、魔法以外の攻撃を無効化し、更に状態異常の殆どをレジストする防御性能の高さだ。

それに対するには魔法を帯びた武器を使用するかダメージソースになる強力な魔法が必要となる。

しかし僕らにはそのどちらも欠けていて、どう鼻肩目に考えても勝ち目が薄かった。

でも、どうしてリッチが城に……。

クエストでは人を逃がさない為に街の入り口に陣取っているはずなんだけど。

いや、この際それはどうでもいい。むしろ城に張り付いているなら好都合だ。

街の入り口にリッチがいないのなら僕らでも突破できる。

クエストをやり過ごすことが出来るはずだ。

「街から一旦出よう」

僕はそう提案した。

ミシエルはリッチの方を一瞥した後、僕の目を見つめて力強く頷いた。

そうと決まれば早いに越したことはない、踵を返して一歩足を踏み出した、その時だ……。

「くだらぬ……」

聞こえるはずのない声が聞こえた。

それは底冷えするような冷たい声色を持つ、死霊使いの声。

「生を謳歌せし愚か者よ……死から逃れられると思うな……」

リッチを視認した段階で気付くべきだった。

骸骨系モンスターは瞳で敵を認識するわけじゃない、生命の鼓動を感じて彼らは敵を認識する。

だから物陰に隠れようと意味をなさない。それは見つかった時点で奴の射程範囲だということだ。

恐怖を感じ、闇に抱かれる。

『サイズ・オブ・ダーク』

ぞくり、と悪寒がした。

「ミシエル、横に飛んで！」そう叫ぶと、僕らは身を隠していた建物から全力で転がるように飛び退いた。

その一瞬後、夜の闇よりも暗い漆黒の風が僕らがさっきまでいた場所を通り、触れた物の生気を吸った。

生気を失った柱は腐り、その場所から建物が滑るようにズシャァン！と音を立てて倒壊する。

「見苦しいぞ」

続けざまに放たれる死の魔法。

生ある者全てを刈り取るそれは触れた者の生気を失わせる。

腕が触れれば腕が腐り落ちる、足に受ければ足が、体に受ければ人は一瞬で死に至る。

「右！」

それを感じただけで避ける。本来ならそんな真似は出来ないだろう。でも、避けている。

「左から来るよ！」

僕はそれを危険なものだと認識して、的確な動作で魔法の通り道を予測していた。

恐らくはキャラクターの能力。

ミシエルが感知していない所を見ると、能力値か何かが関係しているだろうと思えた。

「ミシエル！ どうするっ！？ ツ！ ……屈んで！」

「どうもこうもやるしか！ ないでしょっ！」

言いながらミシエルは体を屈めて漆黒の風をやり過ごし、それと同時に足に力を溜めると一気にその力を解放した。

ダンッ！　ダンッ！　と地面を蹴る音が聞こえる。

ミシエルは蹴る度にスピードを上げて、漆黒の風が発生する頃には既にその先へと足を進めていた。

まるで風になったかのようにリッチの下へと駆け抜ける。

「人風情がよくもやりおる……」

褒めるようなリッチの声が聞こえる。

ミシエルは速さを武器に戦う型、速剣士を極めた前衛……賞賛されて当然。

盗賊になっても、リッチが相手だろうと決して遅れは取らない。

最後の防壁たる漆黒の刃をミシエルは「飛んで！」という僕の声に従ってかわしきる。

そのままの姿勢から身を捻ると、ダガーを斜めに切り下ろしリッチの体に刃の線を描いた。

瞬間、ギャリイ！　と金属と何かが当たる音が響いた。

しかしその音は骸骨を斬り飛ばした音とは違う……。

「ふむ、所詮こんなものだろう」

リッチの体、ダガーの走った場所には傷の一つもない。やはりとすべきか、物理無効能力だ。

ミシエルはそれを見ると「そうだった……」と眉をひそめて呟き、距離を取るために後ろに大きく跳躍した。

その様子を見送りながらリッチは悠々と召喚陣を敷く。

スケルトンソルジャーを一体、二体……三……。

支配モンスターの無限召喚、それはリッチ攻略において絶対に防がなくてはならない一手。

だからこそ僕の脳はいつも通りに思考する。

イベントで、人の手伝いで、ゲームの中で何度も戦ってきたリッチへの対処法。

頭の中に浮かぶ言葉から一つの魔法を選び口にした。

集う力、結ばる前に無塵に返せ。

『デイスペル!』

咄嗟に唱えた物は魔法解除。

ガラスが割れるような音と共に、リッチが展開していた召喚陣を光の粒に変えていく。

しかし既に召喚されたスケルトンソルジャー二体が消えるわけではない。

「鬱陶しい、実に鬱陶しいぞ……小娘」

眼球のないリッチ、その空洞の瞳に怒りが宿る。

それに呼応したかのようにカタカタと骸骨特有の骨鳴り音を響かせながら、スケルトンソルジャーが錆び付いた長剣を構えて僕の方へと向かってきた。

僕はそれを見ると、杖を前方へと突き出す。

スケルトンソルジャーは動きは早くはなく、攻撃力だつてそこまでするほどではない。

でも耐久と速さのない僕にはそんなモンスターですら致命的だ。近寄らせるわけにはいかない。

祈りは天に、求めるは罪人裁く聖なる光。紡ぎ、枷とせよ。

『ホーリィ・チェイン!』



敵一体を束縛する魔法を口にすると、光の鎖が杖の先から何本も生まれスケルトンソルジャーに飛来する。

鎖を鬱陶しそうに長剣でなぎ払おうとするスケルトンソルジャーだが、その剣ごと全身を絡め取られ動きを停止した。

残りは一体。随分と近寄られていて魔法を唱える隙はない……、それどころか既に僕に向かって長剣を振り下ろしていた。

「くっ！」

目を瞑って痛みを覚悟する。

ゲームの中では一撃で体力全てを持っていかれる事はない。でも今の僕がこの長剣に当たればどうなるのだろう。

そう思考すると、恐怖が体を硬直させた。

……。

覚悟した痛みはやってこない。

「もうちょつと前衛を信用してよね」

恐る恐る目を開けて見ると、ミシエルが不満げな様子で僕を見下ろしていた。

辺りにスケルトンソルジャーの姿は無かった。

目を瞑っていた一瞬の内に倒してしまったのだろう。

僕は安堵の息をついた。

状況としては振り出しに戻っただけ。

確認出来たことはやはりと言うべきかミシエルの攻撃が通じなかったこと。

そこから考えるにリッチは間違いなくゲームと同じ能力を持って

いる。

恐らくは僕の持つ攻撃呪文だって有効な攻撃手段にはならないだろう。

「ミシエル。コイツは無理、逃げよう」

今の最善は逃亡。

リッチの相手をする事で、橋で戦っている騎士達の援護をして加勢を待つという方法もある。

でも僕らがどれだけの間耐えればいいのかわからない上に、騎士達が骸骨の群れに勝てる保証もない。

ましてやリッチに抵抗出来る戦力かどうかもわからないのだ。そんな賭けに出る位なら逃げに徹した方がいいと僕は結論を下した。

「うん、賛成ね」

意見を纏める間にも「右！」と放たれる漆黒の風を避け続ける。集中力が切れたら終わりだ。

「魔法で注意を引くから、その内に！」

僕は唾を飲み込むと、杖の先へと意識を集中させた。

力の象徴たる赤の精霊よ。焚ける炎となり、集え！

魔力の流れで、詠唱に気がついたリッチが攻撃の手を休めた。ダメージの可能性がある魔法には警戒してしまうのだろう。この隙を狙いだ。

『ファイアーボール!』

小型の火球を撃ち出す魔法を口にした……途端、目の前が赤に染まった。

デウウウッ! と周囲の空気を燃やしながら突き進む、身の丈を優に超える巨大な火の球。

それはリッチの姿を飲み込むと、周囲の建物を焦がし、溶かし、突き進み、遠く……城の外壁に大穴を作ってから姿を消した。

時を同じくして、橋にいた骸骨達も支えを失ったかのように倒れ、消滅していく。

騎士達も何が起こったのかを理解していない様子で戸惑っているみたいだ。

骸骨が消える……、それは召喚者であるリッチが消滅したことを示している。

その証拠にリッチのいた場所にはドロップアイテムらしき黒い寶石が落ちていた。

まさか下級呪文のファイアーボールで?

いや、そもそもファイアーボールの大きさが尋常ではなかった。

「え?」

あまりの出来事にミシェルは逃げる体制のまま、僕は杖を向けたまま啞然として固まった。

が、焼け焦げた辺りの様子と穴の空いた城に気付くと僕は顔を引き攣らせた。

「どうしよう。お城、壊しちゃったんだけど……」

04・『壊しちゃった』（後書き）

修正 / 2011 / 01 / 27      紅い宝石      黒い宝石

## 05・『噂の二人はドジなだけ』

現在この街には幾つかの噂が流れている。

骸骨の群れは隣国からの攻撃ではないのか？ というもの。

とある宿屋で一夜を明かすと、想い人と結ばれるというもの。

昼飯はヒヨッピの煮込み汁だというもの。

そんな大小混在の噂の中で今最も人気があるのが、襲撃にあった王都を救うべく現れリッチを消滅させた少女達の噂だ。

始めは城の防衛をしていた騎士達を中心に広まった噂だったが、今では王都全域に広がっているという。

そんな噂は当然のように僕やミシエルにも伝わっているわけで、二人ともため息が出る想いだった。

と言うのもリッチを撃退した後、僕らはすぐにその場から逃げ出していたからだ。

ファイアーボールが予想以上に強力だったのは嬉しい誤算だったけれど、周囲の建物やお城を壊してしまったのはまずい。

もしも損害賠償だ！なんて言われたらお金のない僕らはどうすることも出来ないのだ。

だから見つかるわけにはいかないし、憂鬱な気分にもなるというものだった。

「たったの一日で随分とこの街も住み難くなったわよね……」

泊まっていた宿屋、その一階でタロルカジュースを飲みながら落ち込んだ様子でミシエルが言った。

「はふう」とため息をつく仕草は街に起きた惨劇を愁いているようにも見える。

僕もそれに習って伏せ目がちに「うん……」なんて雰囲気を出して言ってみたり。

そんな現実逃避的な行動をしているのにはもちろん理由がある。僕はちらりと店の壁に貼ってある紙に目を向けた。

紙にはこう書いてあった。

神の加護を受け、火の精霊に愛されしエルフの少女。

疾風の如き速さで駆け抜け、二つの牙で闇を切り裂くニヤードの少年。

国を救いし英雄を称えん。

我こそはと思うものは城へ来られたし。

これはどう考えても……。

「あたし達のこと……って、あれ、ニヤードの少年？」

同じように張り紙に視線を送っていたミシエルが眉をひそめながら言った。

「その、ミシエルの事だと思う……」

「え、どうして？ あたしそんなに男の子っぽい？」

ミシエルはそう言うと思議そくに首を傾げて自分の体をキョロキョロと見始めた。

僕としてはなんとなく少年と記された原因がわかる……でも、答えづらい。

言ったらまたほっぺ引つ張られるのかな、なんて思ったりしちゃうわけ。

えーと、どうしよう……、困る。とても困る。

問題の胸の辺りを凝視しても何も浮かばないし、さすがに胸がペ

ったんこだから、なんて言えないし。

あー、うー、えーと……。

そう迷っていると、むすっとした様子で「ニーナ。言わなくてもいいわよ」とミシエルが言った。

「気付いてないと思うんだけど、ニーナって耳が垂れてすごい困ってますって顔に出てるのよ」

「え？」

「その上でじつと胸ばかり見られたらさすがに、ね」

言いたい事が見破られてる！

僕は「ご、ごめんなさい！ だからほっぺは、ほっぺだけわー！」  
と言いながら、頬を両手で隠すように覆った。

出会ってすぐにされたように、ほっぺを引っ張ることで憂さを晴らされるのを避けるためだ。

「別にそんなことしないわよ。悪いのはあの張り紙なんだから」

なぜか呆れたように僕の胸を見ながら言うミシエル。

とりあえず何もされないとわかると、僕は「はふー」と安堵も息を吐いてから言った。

「……よかった。怒られるかと思って」

「怒っても増えるわけじゃないんだし、それにニーナには分けて貰う予定だからいいもの」

「え、分けて……？」

怒られないのはいいんだけど、何やら不穏な空気が漂っている。  
ミシエルの口元はどこか楽しげにニヤつとしてるし。

それにさっきからずっと胸を見られてるような気がする。

胸……？

「こんな風に、毎晩後ろからぎゅーって！」

そう言つとミシエルは目にも止まらぬ速さで動き、僕を後ろから抱きしめた。

「ひ、あつ！　そ、そんなのだめだってば！」

「ダメなのはほっぺだけってさっき言つてたじゃない！」  
「い、言つたけど、言つたけどー！」

そんな風に騒ぐ僕ら。

気付けば他のお客さんから視線が集まっていた。

街が大変な目にあつたばかりなんだから、こんな風に騒げば煩いとか鬱陶しいとか、そういう嫌悪の視線になると思うんだけど……。  
なぜかみんなニヤニヤと僕の方を見て「ニヤードのねーちゃんもつとやれー！」なんて声援を送っていた。

ああ、恥ずかしい。

……。

酒場のマスターがテーブルの上にタロルカジュースを置いた。

そして「いいものを見せて貰ったぜ……。サービスだ」と言つて去っていく。

僕の気分はとても何個も付けてしまうほどに落ち込んでいた。  
色々な尊厳を踏みにじられたような気分……。何か文句を言つた方がいいのかとても悩む。

ミシエルは「にしし」なんて表現が浮かびそうな上機嫌な顔で、リッチから出た黒い宝石を眺めているし。



僕の惨状を気にしない所を見ると、これが女の子同士の常識的なスキンシップだったりするんだろうか。

寝るときもすごいベタベタしてきたし……。

そう考えていくと、あまり不貞腐れてるのもまずい気がした。

不信に思われて男だってばれるのも気まずいし、男だと判つても友達でいてくれるか不安だったのだ。

僕は「はあ」と息を一つ吐いて気持ちを入れ替えると、いつもの調子でミシエルに声をかけた。

「さつきからミシエルは何をしてるの？」

「んー！ もうちょつとだから待ってー」

そう言うつと片目を瞑って宝石をじーつと見つめるミシエル。

僕も身を乗り出して宝石を覗いて見るものの、特に変わった所もなく透き通った色が綺麗だなーって思うくらいだった。

ん……、綺麗だからこそ見てるのかな？ 女の子って宝石とか好きそうだし。

でもミシエルには悪いけど、こんなことをしてるよりは見つかったらまずいお城関係とかそっちの話をしたい……。

そう思つてもう一度声をかけようとした時、「……わかったわ！」と言いながらミシエルが宝石を高く掲げた。

「えつと、ミシエルどうしたの？」

僕がそう聞くとミシエルは得意げに胸を反らして答えた。

「なんとこの宝石はトウオネ石なのよ！」

「トウオネって、素材の？」

「そつよ。闇属性の希少鉱石……すごいレアモノ！」

嬉しさを表すようにミシエルがぴよんぴよんと跳ねた。

トウオネ石はミシエルが喜ぶのも当然で、ゲームの中でもかなりの高値で取引されていた属性持ちの宝石だ。

火のロギナ。水のフレール。風のカーリ。土のイーグル。光のルマリネ。闇のトウオネ。

それぞれが世界を支える神の力……属性を宿しており、様々な用途に使われる。

「すごい……けど、どうしてそれがトウオネ石だったの？ 私には普通の黒い石しか見えないし、リッチのドロップアイテムって似たような黒系の鉱石が多かった気がするんだけど……」

「ふふん、あたしの職業をなんだと思ってるのよ。盗賊、とうぞくさまよ！ 鑑定くらい初期スキルに入ってるわよ！」

「……おおー！ とうぞくさますごい！」

たしかにそんなスキルがあった気がする。

僕は得意げに言ったミシエルをばちと手を叩いて賞賛した。

「じゃあ、じゃあ、それを売ったら私達ってお金持ち？」

「そのとおり、豪遊して暮らせるようになるわ！ 早速売りに行くわよ！」

「うん、行こう！」

僕は突然訪れた幸運に、気持ちを軽くして立ち上がった。

ミシエルに弄られて見世物になったことだって、今なら許せる気がする。

だからびっきりの笑顔で「マスター！ ジュースありがとうございまして！」と言ってから扉を後にした。

しかし……。

現実には中々に甘くなかったようで、トウオネ石を買い取ってくれる店はなかった。

いや、正確には買い取ってはくれるけど、ありえない程の安値での買い取りばかりだったのだ。

「おじさん、希少鉱石のトウオネ石だよ！　なんでそんなに安いんだよ！」

ミシエルがそう詰め寄っても、道具屋の主人も、武器屋の主人も、みんな決まって同じ返答をした。

「トウオネ石ってなんだい？　聞いた事もないね。まあ、銅貨十枚でなら買ってもいいよ」

「そんな、だってこれあのトウオネ石だよ！」

「ミシエル、次行こう……」

こんな具合である。

初めは僕らを騙して利益を得ようとしているのかと思ったけど、どの店も同じ金額を提示したことからその可能性は低いと思った。だからある結論に至った。

トウオネ石は僕ら冒険者、プレイヤーの間では高値で取引されていたのは確かだ。だから銅貨十枚なんて普通はありえない。

でも、街にある商店……NPCだとしてどうだろう。  
ノンプレイヤーキャラクター

一定以上の希少アイテムは一律で同じ売値になっていなかっただろうか？　そう、例えば銅貨十枚とか……。

僕らは日が暮れた頃、トボトボとした足取りで酒場へと戻った。その様子からわかる通りトウオネ石を適正な価格で買い取ってくれる所はなく、何の成果も得られないで帰ることになったのだ。

「今日もヒヨッピの丸焼きとタロルカジュース二人分をお願いね……」

席に着くとミシエルが沈んだトーンで一番安いメニューを注文した。

ヒヨッピの丸焼きが銅貨2枚、タロルカジュースが銅貨1枚と、ポリウムと味の割にお得なメニューである。

他にもケロリンスープとか、トントソテーとか色々あるんだけど、昨日稼いだ分のお金しかないから一番安いのにするのに越した事はないのだ。

「ミシエル、宝石どうしよう……。生産に使う？」

「え、あつ、宝石？ う、えつと、そうね！ どうしよう！」

注文した品が来るまでの間に宝石をどうするか話しておこうと思ったんだけど、ミシエルの様子がおかしい。

落ち着き無く辺りに視線を向けながら、妙にそわそわしているように見えた。

「ミシエル？」

「は、はい！」

ピーンと尻尾を立てながら返事を返すミシエルにくすりと笑いそうになる。

でも、この反応はなんだろう？

トイレに行きたいのを我慢してるとか、そんなわけないと思うし……。うーん。

そうこうしている間に「おや、またアンタたち来てくれたんだね。

今日もたんとお食べ！」なんておばちゃんが料理を運んでくる。

二日連続になるけど、ヒヨッピの丸焼きは相変わらず美味しそうだ。

ミシエルは未だにおかしな挙動をしている。

気にはなるけど、やっぱりご飯は温かい内が一番。

「えっと、先食べちゃうね？」

僕はそう言っているとヒヨッピの丸焼きにフォークを突き刺し、口に入れようとした。

……その時だ。

「ま、待つて、ニーナ。お金、お金足りないのよ……」

ミシエルの口からとんでもない事が発覚した。

通りでミシエルの様子がおかしかったわけだ……。

僕は少し考えた後、そつと肉の突き刺さったフォークを皿へ戻したのだった。

## 06・『人の温もり』

丈の長めな黒字のワンピースにフリルの付いた白いエプロン。頭に付けた、これまたフリルの付いたカチューシャ。

今僕は本来なら絶対に身に付けないであろう装いをしている。有り体に言えばメイド服を着ているのであって……。

「お待たせしました。トントソテーとエールをご注文のお客様ですね？」

こんな声を上げてテーブルの上に料理を運んでいる僕は給仕のお仕事をしているのだ。

ことの発端は前日。

食い逃げ寸前というか注文逃げというか、お金が無いのに料理を注文したのが始まりだった。

僕らは運ばれてきた料理に口を付けず、マスターにお金がないことを話したのだがお肉にフォークが刺さってたりで返品は受け付けて貰えなかった。

でも僕らは罪人としてガードに渡されることもなく、おまけに今晚の宿も提供されていた。

昼間にミシェルと僕が騒いでいたのを見て、それで覚えていてくれたのもあり、後で払ってくれるなら……ということになったのだ。

でも、ここからが問題だった。

支払いの方法を「モンスターを倒して稼いで来ます！」と言ったところ、「その装備じゃ駆け出しだろう？ 無理はするな」なんて言い返されてしまったわけで。

実力を見せようにも『ファイアーボール』はお城壊しがバレるといけないので見せられず、神聖魔法は最上級の回復魔法をかけたにもかかわらず「お譲ちゃん、神聖術士だったのか」と言われたただだった。

ミシエルもこんなことになったのが尾を引いてるのか落ち込んだままだったし……。

そんなわけで僕らは力量を理解されず、給仕として働くことになったのだ。

「えーと……、はい、こちらになります」

僕が笑顔を作ってテーブルに料理を運ぶと、それに気が付いた男が「お、おう」ともった声で返事をしてチラチラと視線を上下に振った。

視線の先は顔と胸の辺りを行ったり来たりとしていてどこを見ているのかは一目瞭然だ。

料理を置くために少し前かがみになると、その視線が胸に釘付けになっているのを感じた。

こういつ視線ってバレバレなんだ……と思いながら、目の前の男の悲しい性に同情した。

「では、ごゆっくりお召し上がりください」

営業スマイルを送って厨房に戻っていく。

何はともあれ、そんな視線くらいで文句を言っていたら仕事なんて出来ないのだ。

出来ないのだが……。

「ニーナは良く平然としてられるわね……」

ミシエルの方は相当参っているようで猫耳がペターンと萎れ、哀愁を漂わせながら肩まで落としている有様だった。

それも仕方がないと言えは仕方がない。

ミシエルは僕とはちよつと衣装の形が違う……、僕のが丈の長いロングバージョンだとすると、ミシエルの衣装は胸元が大きく空いたデザインでスカートの丈が短いショートといった感じた。

さらに両足に食い込むニーソックスとスカート部分の絶対領域が男心を撥る一品になっている。

なので太もも辺りを目掛けて手を出してくる男がいたりするのだ。……もちろんミシエルは速さを活かして華麗に避けているけど。

と、こんな衣装がファンタジーな世界にあるのはおかしく感じるんだけど、残念ながら人気アニメとのコラボでゲームの中に衣装が実装されていた。

衣装を渡された時に不思議に思っただけ聞いてみたら、神聖教会の偉いさんがご神託を賜って服のデザインを世に発表してるんだとか。ここの宗教は一体何を信仰しているんだろう……。

「平気というわけじゃないけど、お仕事だつて割り切るしかないと思うよ」

不満を言っても始まらないし、僕はミシエルにそう答えるとお皿を何枚か掴んで新しいテーブルへと向かった。

酒場は盛況そのもので、勤め帰りらしき騎士、大斧を担いだ冒険者、ぼろっつい衣服だけの男など様々な職種の人や種族が来ているようで、マスターと奥さんの二人でやっていたとはとても思えないくらいだった。

そんな活気に満ち溢れている酒場だからだろうか、色々な話を聞けるのがとても楽しい。

手に二枚。腕から胸の上にかけて更に二枚乗せながらトテトと



歩けば……。

「例の、リッチを殺った奴らはみつかったのか？」

「いいや、さっぱりだ。貧民街のガキが来たり偽者ばかり城に来やがるしよ……。しまいにはゴブリンの親子まで騙ってきやがったんだぜ」

「そりゃ災難だなあ。ま、ほれ、一杯飲めや」

なんて話が耳に入るし。

「おいおい、あのニヤードのねーちゃんパンツ見えそうだぜ……」

「エルフの娘も見ろよ。細身の体に乳が……、すげえ……」

「はあ……はあ……」

こんな話も……いや、これは聞くべきじゃない。

「この間、銀山が閉鎖されたじゃろ？　ありやモンスターの仕業らしいぞい」

「おい、もうボケたのかよ爺さん。銀山が閉鎖したのはもう十年も前のことだろーが」

と、バリエーションに飛んだ話を耳にすることが出来る。

情報は酒場で得る物だって言うけど、本当にここは情報の宝庫だと思えた。

……。そんな風にテーブルを何度も回って、客の入りが途絶えてきた頃だ。

マスターから「もうあがっていいぞ。裏に回りな」と声をかけら

れた。

「あ、はいっ。じゃあ、最後にコレ運んでからにしますね」

僕はそう返事をして今日最後になる皿をお客さんの所へ運ぶと、酒場の裏手に通じる扉をくぐった。

酒場の裏手はマスターと奥さんの住居になっていて、先についていたミシエルが「んんっ、はむっ」とトントソテーを食べていた。一日中給仕をしていたからメニューにある品はばっちり把握している。

「ああ、ニーナちゃんかい。お疲れ様だよ。ほら、そこにあるのはサービスだからね、冷める前に食べちゃいな」

おばちゃんにそう言われると、僕はミシエルの前に座ってソテーを食べ始めた。

トントソテーは大きめにカットされたトントソというモンスターの肉と大小の野菜をゴロゴロと入れた炒め物だ。

口を運べばシャキシャキとした野菜の食感と、溢れる肉汁が妙にマッチしていて非常に美味しい。

ご飯が欲しくなるところだけど……、そう思いながらパンを千切って口に入れた。

「ミシエル。今日の、楽しかったね」

行儀がちょっと悪いけど僕は食べながら話しかけることにした。それに対してミシエルは何かを喋ろうとして「んっくっ!？」と喉を詰まらせてから答えた。

「急に話しかけてくるから、もー……。うーん、あたしは変なの一杯いたし、でも、うん。たぶん、楽しかったわ」

ミシエルも歯切れの悪い答えだったけど、楽しかったようだ。思い出すように身振り手ぶりを交えながらミシエルが言葉を続けた。

「ほら、料理運んでいくじゃない？ お尻触ってこようとするのはウザいんだけど、色々な話し聞けたのよ」

「うんうん。私も色々話し聞いちゃった。あれ、変なのとか混じってたよね」

「そーそー！ 銀山のお爺さんとか、通りがかる度に「この間、銀山が」って同じことばかり言ってるの。あれには笑っちゃったわ」「それ相手の人も何度も訂正してて、大変そうだったよね」

僕はマスターが来るまでの間こうやって話を咲かせていた。

その話しの中には僕は直接聞けていなかったけど、クエスト『王都襲撃』の被害の話もあった。

避難した人達は神聖教会や職業修練所とかそういった施設に逃げ込んだりして死傷者は殆どいなかったらしい。

知ってる人はいないけど、なんとなく良かったなっと思う。

「でね、このリザードの奴なんだけど、尻尾であたしのスカート捲ろうとしてきたのよ」

「わわ、さっきも撃退された人でしょそれ！。チャレンジャー」

「そうなのよ！ あのトカゲ……」

部屋に着いても話しは尽きる事はなく、夜通し僕は話しを続けた。

部屋の方はマスターが今日の分まで無料で泊まっていって言うてくれていた。

何から何までお世話になりっぱなしで、ちょっと悪いなっと思っ  
てしまふくらい。

でも、そんな好意に少しだけひっかかる物を僕は感じていた。

僕の手の中にある、メイド服。

マスターは僕らにこの装備まで無償でプレゼントしてくれたのだ。  
ミシエルは「あたし達、気に入られてるわね。ふふんっ」なんて  
得意げになっ  
て喜んでいたらけれど、僕はこれを単純に喜ぶことは出  
来なかった。

だって、メイド服はクエストを経由して得られる装備で、そのク  
エストはどこかの酒場だったから。

だって、メイド服はNPCのお店でもそれなりの値段で売れるも  
ので、無償で渡せるようなものではないハズだから。

推測が正しければ、マスターの好意はゲームのクエストによるも  
の。

ゲームの世界だとは思っていたけれど、人の好意までプログラム  
に左右されているのはなんだか怖い気がした。

「ニーナ、どうしたの？」

「あ、うん。少し眠いなっ  
て」

「眠いって……あぁっ、もう外が明るい！ 早く寝ないと！ ニー  
ナ、ぎゅーってさせて、ぎゅーって！」

そう言っ  
て僕をベッドの中に引きずり込むミシエル。

そんな行動を見ると、あまり深く考えない方がいいのかな？  
と迷っ  
てしまふ。

でも……。

「うん、一杯ぎゅーっていいよ。今日はさーびすだからね」

ちよっただけ人のぬくもりが欲しい……、そう思った。

06・『人の温もり』（後書き）

2011/01/31 通りかかる旅に

通りがかる度に

07・『カチカチ』

「カチカチパンを……えーっと、4ついただけますか？」

「あいよ。お譲ちゃん可愛いから……銅貨3枚にまけておくよ」

僕は笑みを向けて「ありがとうー」と言ってから、メイド服のエプロンに付いたポケットに手を入れた。

銅貨を一、二、三枚……そして残りは1枚つと。

注文逃げの一軒があつた為、僕がお金を管理することになった。

ミシエルには悪いけど、やっぱり不安だし……。

僕はパンを受け取ると「またよろしくな」という声を背後に聞きながら外で待っていたミシエルに声をかけた。

「お待たせー」

「ちゃんとお買い物は出来たー？」

ミシエルじゃあるまいし……なんて思いながら、曖昧に笑ってパンを二つ手渡す。

「四つ買ったから、ミシエルの分はこっちな」

「うむうむ。って、このパンは名前通り本当に硬いのね」

「そうみたい。カチカチに作って保存食にしてるって言ってたよ」

「……カンパンみたいなもののかしら」

ブツブツと言い、パンを興味深そうに見るミシエル。

その眩きの通りカンパンに似ている食べ物で、拳大のサイズをしたこの丸パンはモチモチ感は一切ないらしい。

保存食として利用されているのも同じで、ちょっと遠出する時に

携帯するのがこの世界での常識らしかった。

さて、どうして僕らがそんな保存食を購入したのかと言うと……。昨日酒場で聞いた銀山へと向かうためだった。

短絡的だと思うかもしれないけど、僕の予想通りならあの漫才のような会話はクエスト関係じゃないかなって睨んでいたりして、何らかの報酬が期待出来る気がしたのだ。

もしクエストじゃなくても、銀山なら銀鉱石がザックザック眠っている可能性もあって武器を作る材料にもなるし。

そんなわけで僕らはひらひらとメイド服をひるがえしながら街の正門へと歩いていく。

これから銀山に行く格好としてはシウルだけど、ちょっとした能力補正が付いていて中々侮れない性能の服なのだ。

見ために関しては元々の初期服がコスプレみたいな物だったし、慣れとは怖いもので昨日一日着ていたことで何とも思わなくなっていた。

「ニーナ、銀山ってどこにあるか知ってるの？」

「えっと、たしか……。まずは街の正門から出るよね」

「うん」

「それからまっすぐの道があるんだけど、三つに別れている所を左だったと思うよ」

僕らは歩きながら道の確認を始めた。

現在地の王都は大陸西の端っこにあり、その正面にはただっ広い平原が広がっている。

その草原の北側に隣接した森、その傍を通るように一本の道があって、中ほどから北、東、南の三方向へ道が別れている。

僕らが目指す銀山はその内の北で、あとは道なりに森の中を進ん



でいけば目的の場所に辿り着ける寸法だった。

「あの、銀山つてこの道を通って直ぐ行って途中を左ですよ？」

「銀山？ ああ、ヘンネ村に行くんだろ。そっちで間違いないねえぞ」

念のために正門の騎士に声をかけて確認するのも忘れない。

銀山の麓にはたしかに一つ村があったはずだし、方向は合っているみたいだ。

僕は「ありがとう！」と手を振り、正門を抜けた。

ぶぎゅ！

ぶぎゅぶぎゅ！

平原はこの鳴き声で判る通り、ヒヨッピの生息地になっている。なのでついではかりにミシエルがヒヨッピにダガーを突きたてながら歩く。

路銀を稼ぐことまで出来る、一石二鳥の旅だ。

ぶぎゅ！

「よし、これで30枚」

「おー、やっぱり盗賊だと集めるの早いね」

「ふふん、もちろんよー。と、言いたいんだけど、まだ盗みのスキルが無いから微妙なのよね」

そう言いながらミシエルはやれやれといった感じに肩をすくめ、両手を持ち上げた。

職業スキルは初期スキル以外は購入するかモンスターからスクロールというアイテムを入手しなくてはならないのだ。

なのでお金もなく、モンスターからも手に入れていない僕らは新しいスキルを使えない。

世の中は本当に世知辛いと思う。

「このまま行ったらヘンネ村に着くまでに羽が一杯になって大変なことになりそうよね」

「でも、他にすることもないし、ポケットに詰められるだけ詰めてもいいかも？」

「ん、じゃあ、一杯にしちゃうわよー！ えーい！」

こんな風に始めは余裕を持っていたのだが……。

太陽が真上から横に傾き。

「もうすぐ百匹よ！」

「あ、あそこに一匹いるよー！」

さらに日が暮れ、辺りもすっかり暗くなった頃。

僕らは未だ道の分岐点にすら到達出来ていない事に気が付いた。

「ニーナ……。これ、道あつてるのよね……」

「一本道だったし、あつてるも何もないはずなんだけど……」

僕らはポケットをヒョッピの羽でパンパンにして、真っ暗な道をひたすらに歩いていた。

昼間しか出現しないヒョッピの姿はとくにない。

変わりに、ワォーンという犬のような遠吠えが聞こえ始めていた。

「ミシエル、休憩しない……？」

「お腹も空いてるし、そうね……。うーんと、あそこの木なんかい

いんじゃない？」

僕が提案すると、ミシエルが森から草原側にはみ出している木を指差した。

木の周りには草も生えていなく、休むのに丁度良さそうだと感じた。

「はふー……」

「よーいしょっと」

僕とミシエルは掛け声を出しながら木に背中を預けて座った。

両足を「んーっ！」って思いっきり伸ばすと、とても気持ちがいい。

隣を見るとミシエルも同じように足を伸ばして疲れを取っているみたいだった。

「ミシエル、ごめんね。ヘンネ村までこんなにかかると思わなくて……」

僕がそう言うのとミシエルは不思議そうに僕を見つめた後、呆れたような口調で答えた。

「なーに謝ってるの。あたしだってすぐに着くと思ったし、ヘンネ村までゲームだと三十分かからないでしょ？」

「うん。かからないハズ……、でも王都だってすごい広くなったたし、こっちも時間すごいかかるって気付くべきだったから」

「そうだけど、今更言っても遅いじゃない。それに……」

ミシエルは言葉を溜めた後「じゃーん！」と言って力チ力チパンを取り出した。

「ほら、お腹減ってるからそういう風に落ち込んじゃうのよ。食べよ？」

「え、あ、うん」

あまり関係ないような気もするけど、ミシエルが言ったように今更言っても現状は仕方ないし変わらないのだ。

お腹が減っているのも確かで、あまり深く考えてもしようがない  
と思い、僕もパンを取り出して噛り付いた。

瞬間、ガチツ！ と何か嫌な音がした。

隣でも同じようにガチン！ と音がする。

「うっ！」

「な、なにこれ！ 硬すぎよ！」

僕とミシエルは顎をさすりながら、音を鳴らした物体をしげしげと見つめた。

それは自己主張するかのように月の光を反射して照り光っていた。  
噛んだ場所に歯型すら付いて居ない、カチカチパン。

「これってどうやって食べればいいのかな……」

「そんなの気合に決まって……はむっ！ んっ！ かったーい！」

こんなの食べられるわけがない。

でもやっぱりお腹は空いているし唾液がさつきからじわーっと出てきている。

別の食べ物があればいいんだけどこれしか持っていない僕らは、  
カチカチパンを食べる方法を考えるはめになった。

結果どうなったかというと……。

「んんむう、あむ、んんうつ！」

「むうーむん、んんうつ！ うー！」

パンを口で咥え、唾液で柔らかくする作戦に出たのだ。

もちろん口にあんな物を咥えているんだから、満足に話しだつて出来やしない。

僕は「ふぐふぐっ！」と言葉にならない声を上げ、杖を構えて立ち上がった。

そして唱える。

力の象徴たる赤の精霊よ。焚ける炎となり、集え。

「ふあうふあーふおーう！」

うゝ……発動しない。

僕は口からパンをカポツと取り外すと、赤面しながらもう一度魔法のキーを口にした。

『ファイアーボール！』

ゴウツという音と共に巨大な火球が現れ、辺りを照らす。

照らした先には一、二、三……六……十と数えるのも面倒な量の沢山のモンスターに囲まれていた。

グルルと喉を唸らせ、開いた口から涎を垂らして僕とミシエルを取り囲むそれはフォレストウルフ。

ヒヨッピと交換する形で夜の平原に出没する狼型モンスターだった。

チュウウ！ その包囲の一角を火球が突き抜け、数匹のフォレストウルフを焼き飛ばしていく。

「囲まれてるよ！」

僕はそう言っただけを振り返る。

するとパンを大事そうに口に含んだまま「ぐ、ふぐうー！」と声を上げ、ダガーを取り出すミシエルの姿が見えた。

その姿はとも情けないのに、ミシエルがダガーを振るうと面白いようにフォレストウルフが倒れていく。

絵面的に何かが間違っている気もするけど、たぶん気にしたら負けだ。

「今度は、そっち！ 『ファイアーボール！』」

僕も負けじと魔法を唱える。

その度に肉の焼ける匂いがして、フォレストウルフのドロップアイテムである牙が地面に落ちる。

確実に数を減らしているはず。

なのに、僕らを包囲するフォレストウルフは一向にその数を減らしているようには見えない。

それどころか増えているようにすら感じた。

「……ッ！？」

丁度魔法を撃ち終わって次の対象を決めるとき、タイミングを伺っていたのかフォレストウルフが僕へと飛び掛ってきた。

その数は二。

僕は杖を横に薙ぎながら一匹目のフォレストウルフを横に飛ぶ事で回避する。

そのまま地に足が着くと、腰を低くして杖を斜めに振り上げた。

「こ、のっ！」

気合の声と共に放った一撃は、二匹目の頭部に当たりフォレストウルフを遠くへと弾き飛ばす。

この程度の数なら僕の近接能力でだってなんとかなる範囲のよう  
だ。

でも、もっと多くの敵に攻撃されたら……、そう考えると悠長な  
真似はしてられない気がした。

杖を構え、牽制しながらチラリと後方へ視線を送る。

ミシエルは「ふぐっ！ ふぐうー！」と何か言いながらモンスター  
の群れに突っ込み、ダガーを一心不乱に振っていた。

その周囲には大量の牙が地面に落ちている。

それはかなりのフォレストウルフを倒した証でもあるんだけど、  
残念ながら包囲する敵の数が緩んでいるようには見えなかった。

「敵多すぎるよ！ 一旦合流しよ！」

「ふぐっ！」

僕はその返事を肯定と取り、ゆっくりと後ずさる。

ミシエルも敵を振り切ったのか、僕の後ろでトンツという着地の  
音が聞こえた。

そして、どうしようか話をきり出そうとした時……。

「助太刀します！」

と、すぐ後ろ、背後から幼い女の子の声がした。

さらにその後ろ、遠くからは「ふぐうー！」という声が聞こえる。  
僕は乱入者に驚きながらも、ミシエルとの意思の疎通が出来てい

なかったことを悟ったのだった。

## 08・『クルミ』

ボロ布のような色褪せたロープを翻し、幼い少女が黒い髪、ツインテールを揺らしながら舞う。

手に持った赤黒い短刀を真上に向けながら、宙に傷を作るように振るっていく。

紫の光線が走り、次第にそれは一つの意味を成す。

黄泉に迷いし靈魂よ。我が魔力を喰らい、契約と共に器へ満つるがいい。

『リビング・デス！』

描かれたのは屍術独特の魔法陣。

死せる者を生き返らせ自分の下僕と成し、恐れを知らぬ兵として扱う魔法。

その効果は撒かれた触媒を対象に行われる。  
即ち……。

「ふぐう！？」

地面に落ちていたフォレストウルフの牙。

そこを始点として目覚める大量の死者は、フォレストウルフの亡骸。

カタカタと揺れ、白い骨が向き出しの不死なる獣、ボーンウルフの召喚だ。

その異様な光景を前に、フォレストウルフ達は遠巻きに唸りをあげる。



「みんな、やつちゃってくださいー！」

黒髪の少女が声を張り上げると、短剣を掲げ指揮棒のように振った。

少女の指揮に合わせて、ボーンウルフの群れがフォレストウルフの群れに襲いかかる。

だが、始めに飛び掛ったボーンウルフは骨を撒き散らしながら潰された。

二匹目もフォレストウルフの体当たりにより頭の骨を吹き飛ばされた。

かろうじて三匹目がフォレストウルフの首に喰らい付き、その命を奪った。

同型モンスターによる多数対多数の戦いは数の多さ、質の良さで勝負が決まると言っている。

数にしても肉体能力でいっても肉のあるフォレストウルフが有利だ。

だから、ぶつかり合えば当然のようにボーンウルフの被害が多くなる。

しかしだ、ボーンウルフが劣勢に立たされることはなかった。

ボーンウルフの強みは骨を食い飛ばされても何の反応も示さずに突き進む愚直さと、その体が欠けても術者の魔力で補充され再生する継続戦闘能力にある。

滅することのない体で、緩やかに相手の戦力を削いでいくことこそがボーンウルフの真価なのだ。

次第に数を少なくしていくフォレストウルフ。

狼達の攻防戦を前に、僕はその光景に圧倒されながらも少女の背

後を守るように位置取った。

もしこの状況が逆転されるとすれば、指揮者である少女がやられた時に限るからだ。

……。

フォレストウルフとボーンウルフの数の天秤が傾いた頃、フォレストウルフの達は森の中へ逃げるように駆けていった。

それに少し遅れるようにボーンウルフが塵へと変わる。

魔法の効果を切ったのだろうと思った。

「助けてくれて、ありがとうね」

「いえいえ、同じ冒険者として助け合うのは当然のことですから！」

僕がお礼を言うと、少女はハキハキとした口調で答えた。

さっきの魔法を見ると屍術士なのだと思うけど、素直そうな口調とのギャップが凄まじい。

「私は、神聖、あー、えっと、精霊術士のニーナ。そしてこっちが

……」

「ふぐうー！」

「こっちが、盗賊のミシエルね」

「はいっ。ニーナさんとミシエルさんですね！　しっかり覚えました！　あ、申し送れましたけどクルミは屍術士です！」

クルミと名乗った少女はぺこりとお辞儀をしながら言った。

未だにパンと格闘しているミシエルは放っておき、僕らは何度か言葉を交わした。

聞くとところによると、この少女……クルミもヘンネ村へ行く途中だったらしい。

王都へは職業に就くために行っていたらしく、やつのことで屍術士になれたのだとか。

「あれ、職業って職業選定所でお祈りするだけじゃなかったかな？」  
「お祈りするだけなんですけど……、クルミは能力が足りなくて……。恥かしながら、長い時間かかったんですよー」

転職に能力が必要、というのは初耳だった。

この世界独特のシステムなのかな？ もしくは僕らプレイヤーの場合は始めから転職に必要な能力というのがあった？

どちらにしても既に転職してしまっている僕らには関係ないけれど……。

「そっか、がんばったんだね」

「そうですそうです！ がんばりました！ なので、早く父と母に報告しに行こうと思ってるのです！」

「おー、じゃあ、急いで帰らないとね」

「ですすっ！」

そんな調子で元気良く話すクルミだったが、ふと何かに気付いたように横に視線を向けた。

「そういえば、ずっと気になっていたのですけど……」

「うんうん、何かな？」

「あの、ミシエルさんはどうしてそのままカチカチパンをお口に入れているのですか？」

僕とクルミから視線が集まると「ふぐ？」とミシエルが声を上げた。

どうやら、まだ食べられる柔さにはなっていないらしい。

でも、なんだろう？ クルミの聞き方に違和感を覚える。

「えっと、そのままって？」

「はいっ、普通は何か硬いもので……えいっ！ って砕いて、中の柔いところだけ食べますよね。だからそのまま食べるのってクルミは珍しいと思って」

「……そ、そうなんだ」

「ふぐっ！？」

「あつ、ええと！ 別にミシエルさんが変わって言うてるんじゃないくて！ ニヤードってすごい食べ方するんですねって……。あ、その、えっと、う……、ミシエル、さん……？」

驚愕の事実を得ると共に、僕達の無知さを披露してしまったようだ。

まさか力チ力チパンにそんな食べ方があるとは思わなかった。  
ミシエルなんて涙目になり「あたしがんばったのに……」と言いながら唾液濡れのパンをエプロンで拭いてるし。

僕たちの苦労は何だったんだろう……。

他にも旅をする時の心得のようなものまで教えて貰った。

中でも耳寄りだったのがモンスター避けの匂い袋で、これがないと匂いを嗅ぎつけられてモンスターと遭遇する可能性が格段にあがり、おちおち休んでもいられなくなるんだとか。

僕らが匂い袋を所持していなかったことをクルミに告げると、酷く驚かれると共に、大量のフォレストウルフに襲われていたことにも納得したようだった。

……。

休んだ後、クルミと僕らは行動を共にすることになった。

行き先が同じヘンネ村ということもあったし、クルミの使った魔法『リビング・デス』は消費魔力が多く、残りの魔力を考えると一人で進むのは心許なかったらしい。

少し休んだら魔力とかつて全快するんじゃないのかな？　と思っただけど、どういことなんだろ。

ダスク・ワールドでは知力の高さに応じて数秒毎に魔力の回復がされていた。当然高い数値の方が回復が早い。

どんなに知力が低くても何分も過ぎれば全快になるとは思うんだけど……。

やっぱりゲームとこっちの世界では何かしらのズレがあるのだろうか？　その内、調べて見る必要があると思った。

僕は平原の文基点である三叉を北に進み、森の中へ入った。

背の高い針葉樹が立ち並ぶ薄暗い森だったけれど、道には木の合間から光が差し込み、不気味というよりは綺麗といった景観だった。クルミと出会ってからにはモンスターに遭遇することもなく、順調な旅路だったといえる。

「見えてきました！　あれがヘンネ村です！」

故郷の村に帰れるのが嬉しいのか、クルミがはしゃいだ様子で声を上げた。

その声につられて遠くを見れば、茶色い建物が木の隙間から見え隠れしている。

「あそこにクルミの家があるのね。早く着いて普通のご飯が食べたいわ」

「はいっ！　お山では美味しいものが一杯とれますからご飯は美味しいですよ！　ミシエルさん、行きましょー！」

カチカチパンはこりこりなのかミシェルが愚痴る。

それを聞いたクルミは手を大きく振って「一杯」の部分を強調すると、先導するように歩調を速めた。

でも、さすがに村が見えたとはいえ、まだまだ時間はかかる。

そんな、村につくまでの合間に、クルミが村について色々語り始めた。

「まずは、成り立ちからなのですけどー……。お二人は銀山に向かっているのですよね？」

「うん、そうだよー」

「そそ！ 銀をざつくざつく掘るのよっ」

「それでは、その銀山なのですが……」

クルミによるとヘンネ村は銀山を背にした銀の採掘で栄えた村で、その時似働いていた労働者達が主な住人となっているという。

現在はモンスターの増加により銀山で採掘は出来なくなったが、もう一度銀山で掘るために住人全員が力を合わせてがんばっているのだとか。

クルミが子供なりに冒険者……屍術士になったのも、村のみんなと一緒に銀山をモンスターから取り戻すためらしい。

物凄い健気というか、いい子だなー……と思う。

そういった村の話が一段落した頃、僕は村の入り口、木で作られたアーチの前で立ち止まった。

「ここが入り口です！ お二人とも、ヘンネ村に……。ようこ、そ……」

クルミが嬉しそうにアーチに駆け寄り、村の紹介をしようとしたが、目の前にある奇妙な物を見ると、言葉の先を失わせていつ

た。

……奇妙な物。

それは二本の支柱、その片方は途中から折れ、ウェルカム！と書かれた上部の看板が地面に落ちている。

そんな、過去にアーチだったであろう物。

「どうして、看板が……おかしいです。クルミ、ちょっと行ってきます！」

「え、クルミちゃん。待って！」

静止の声も聞かず、クルミが村の中へと走っていく。

唐突な行動に対応できずにいると、ミシエルが「ニーナ、何してるの！」と言って走り出した。

そうだ。固まっている場合じゃない。

アーチが壊されていたということは、壊れた原因があるのだ。

アーチの奥、村の中も何らかの破壊の跡がある。

僕は心臓がドクドクと早まるのを感じながら、ミシエルに続いてクルミの後を追った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3701q/>

---

冒険の続きをしよう

2011年2月10日02時07分発行